

[ゲスト、北原保洋さんと亀屋幸子さんのトークから]

— @谷中コミュニティセンター

●映画をご覧になっていかがでしたか？

北原：実に生々しいというか…僕も一時帰宅はしているんですが、あまり時間もなくて、線量計とのにらめっこで、あの映画に出てくる中井さんの気持ち、あれは一時帰宅した人みんな同じだと思います。自分の目的を果たすだけで精一杯だったから、この映画で広範囲の様子を見て本当にびっくりしました。すっかり変わり果てていて…。事故前までは半農半漁の生活でお米もよく実るし魚も獲れるし、林業もそこそこだったから…今はすさんだという感じになっています。

亀屋：やっぱり自分たちがいつも見ていた風景と全然違うんですね。ああ、こんなになっているんだと胸がいっぱいになってしまって、もうどう考えていいのか…。テレビで見ると現実とは全然違うんです。一時帰宅で帰った時のことで一番怖かったのは、道路工事している人たちを見ると、ガスマスクをしているんです。そのすぐそばを私たちは通って…。その時は怖かったですね。

●現在の生活はどんな状況ですか？

北原：去年の3月31日までは埼玉のスーパーアリーナ、4月1日からは埼玉の騎西高校へ。教室に畳を入れてくれて、これで少し落ち着けるかなって、ちょっと安心しました。近くには学校とか幼稚園もありますし。今はさいたま市の借り上げ住宅から（騎西高校の近くの田んぼに）通っています。去年の3月にスーパーアリーナでおかあちゃんが体調を崩して療養のためにそちらに移りました。僕はそのまま騎西高校の家庭科室にいて、さいたま市のほうと二重生活のような感じです。

亀屋：私は今港区の浜松町の借り上げ住宅にお世話になっています。テレビで官邸の前でデモをやっているのを見て、それで東京の人たちはこんなにがんばっているのに、自分は何をやっているんだと自分に言い聞かせて、行かれるかぎり金曜日に出かけていたり、国会や東電にも行って話をしました。でも、私たちの言葉は伝わらないんですよ。

借り上げ住宅は2年の期限が1年のびて、平成26年の3月31日までいられることになりました。でも、そのあとは行くところがないんです。賠償のことがきちんと決まれば、私たちは再出発できるんですよ。今は何にもないです。目の前が真っ暗です。行くところがない、それが今一番心配なことです。

●避難生活をするなかで東京の皆さんに一番伝えたいことは何ですか？

亀屋：地域になかなか慣れることができません。東京のどまんなかで17階建てのマンションにいて、来た当初は近所で会話する人がいなかったんです。1か月半ぐらいいは、毎晩泣いていました。でも、今は自分がしっかりしなくちゃいけない、と思っています。今の私の本当の気持ちは、ふるさとに帰りたいんです。本当に帰りたい。帰れないのわかっていても、いつかは帰れると思ってがんばりますので、皆さん、どうぞ応援してください。お願いします。

北原：今双葉町は来年度の4月からいわき市の上田町に移転することが決まっています。今、調査しているところです。騎西高校のほうは二人ぐらい職員が残って、上田町には2階建てのプレハブをつくる計画です。さいたまに来たときは、福島県から言われるんですよ、なんでそんな遠くにいるんだとか、早く戻ってこいとか。県内の人たちからは異端児みたいに思われてきました。また、県内と県外がつながることはむず

かしいんです。双葉の人たちがまた一緒に暮らせるといいんですが…。

=====

*会場からの発言をご紹介します。双葉町から避難されている方です。

「今日ここに参加されている皆さんに2つお願いがあります。1つは風評被害について。今福島県で、こうしている間にも苦しんでいる方がたくさんいます。避難したくてもできない。あるいは、先祖伝来の土地を守りたい。福島はこれまで食糧基地として、何とか日本のためにがんばってきました。実際、福島県の米や野菜など多くの生産物は検査のうえで流通されています。今年の8月に日本生態系協会の会長の『福島県の人とは将来結婚しない方がいい』という発言が新聞に出て、これは多くの批判を浴びていました。私も現在、上尾で米づくりをしていますが、福島の人がつくっている米はいやだという方もいるんです。いろんな面でどうぞ皆さん正しく理解していただきたいと思います。もう一つは、こちらに来て私たちがつくった電気がどう消費されているのかを見て、やはり省エネの覚悟が皆さん必要だと思います。あまりにも文化的な豊かな暮らしを追い求めている。もっと省エネ、節電を真剣に実践してください」

|

|